
赤い鼓動の剣撃ム

黒崎 千叉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤い鼓動の剣撃ム

【Nコード】

N5371P

【作者名】

黒崎 千叉

【あらすじ】

突然、人々に光とともに舞い降りたそれはまるで魔法だった。『個々の心臓、身体中の脈が具現化』された武器、『ビーツ』。それを活用することによって大きな変貌をとげた世界。歴史上に残る、人類の大きな発展だった。

あの日までは…

十六歳のユトにふりかかる不幸、苦難。

少年はそんななか、真実を知るために今日も『依頼』を遂行する。

あかいこどうのけんげきし

十年前のこと

鼓動を具現化した武器、『ブーツ』を手にすることを可能にした人々『ヴィーター』。

彼らが集められたのはとある教会だった。

千を越える人が収納できるほどの大きな教会。

その前の教壇に、一人の黒いマントを羽織った男がたっていた。

そして、その男が軽く手を上げた瞬間

瞬くほどの赤い閃光がほとばしり

『世界』は完全に狂った

ブーツだけでなく、『筋力』が強化され、『属性魔法』を操ることができるようになったヴィーター

しかし、多くのモノは『人の形をとどめていなかった』
人々はそれを『クレジア』と呼んだ。

…そして現在、世界は荒れている。

弱いヴィーターは日々クレジアからの攻撃を受け、死人すらでる始末。

しかし、そんなクレジアを『除去する人間』が生まれた。

少年と少女

街には人々の悲鳴が轟いていた。それは老若男女問わず、中には断末魔の声さえも聞こえた。

道にいらんだテントは燃え、家は壊滅しているものすら見られる。

「おい！早く逃げろ！！『奴ら』に追いつかれるぞ！！」

叫ぶ一人の男。誰かに向けて放ったかはわからないが、とにかく必死の聲が飛んだ。

呼応するかのように、他の男が声を上げる。

「クソオ！『戦える』やつはいないのか！？このままではこの街が全滅……」

が、その声は飛ぶことなく、路地からいきなり現れた『生き物』によって叩き落とされた。

「う、うわあ！出やがった！『異形態人間』クレジアだあ！！」

近くにいた青年が恐怖の音を響かせる。

『クレジア』と呼ばれた生き物はゆっくりと彼に向き合い、そして

人の声とは思えない声を発した。

「どうしたんだ青年。『ブーツ』を出さないのか？戦わないのか？
クク…」

「…くっそお！」

青年はそう言われると、胸の前に拳を掲げ、何かを呟いた。一瞬眩い閃光が走り、そして青年の手には少し曲線を帯びた『ナイフ』が握られていた。

「ほう、それが『お前の武器』か。それで俺を殺れるのか？キシシッ…」

それを見て明らかに余裕の表情を見せるクレジア。
青年は恐怖と焦りから、そのナイフを持って正面から突っ込んだ。

「らああああ！！」

「ほう、いきなり斬りかかるとは、その勇気は認めよう。だがな…」

クレジアは声を漏らし、そしてナイフを持つ青年の腕を掴んだ。

「なっ、なに!？」

「この程度じゃあ『俺たち』を楽しませるのは無理だなあ……クク、じゃあな」

絶望に染まる青年の声、そして運命を決定づけるかのように、人間ではありえないほど広く口を開けたクレジアは、容赦なく灼熱の『炎弾』をぶつけた。

声一つ上げられず、ゆっくりと倒れる青年。

握られていたナイフは消え、彼の手には冷たい地面が触れられていた。

ただ、その青年がその温度を感じることは永久にないだろう。

そして、

「∴『これ』が抱いてたのは、勇気とか希望じゃなくてただの『無謀』だな、キシシ」

口から熱気をたれながす人の形をした化け物の声が宙をただよい、そして炎の中に消えた。

とある荒野、一人の少年が歩いていた。黒髪のツープロックをし、

顔つきは整っているが、それはどこか気だるそうな印象を与える。

そして、彼の少し後ろから駆けてくる小さな少女。顔を見る限り、恐らくハーフなのだろう。少女は茶色のセミロングの髪を揺らし、クリッとした目を前方の背中に向けて言った。

「ねえユトー！待ってよー！！」

少し辛そうな少女の声。

ユトと呼ばれた少年は、面倒くさそうに言った。

「お前が道草食ってるから悪いんだろ？お子様が…」

お子様扱いされた少女、夏咲ミリーナ（ナツザキミリーナ）は負けじと反抗した。

「子供子供って言うけど、ユトと同じ年なんだよ！？」

「そうやって、いちいち突っかかってくるのがお子様なんだよ。ガキか…いや、ガキだな」

歩くのを止めるどころか、歩く速度を緩めることさえない少年、ユト。その行動が、言動が夏咲を怒らせた。

「…ユトオオオオ！！」

「ったく、次はなんだよ……っってお前っ…」

夏咲はツカツかと前を歩くユトに背後からタックルをくらわせた。
いきなりの出来事になんの対応もできず、身長177センチほどの
彼は153センチほどの少女に飛ばされた。

ユトはあっけなく転がり、そして岩で頭をぶつける。

彼は痛みに片方の眉毛をつり上げながら叫んだ。

「ミリナ！てめえ何のつもりなんだよ！！」

夏咲は負けじと叫ぶ。

「ユトが待ってくれないからだよ！人のこと散々バカにしといて！」

「だからお前がトロトロしてるから悪いんだろ！？」

「しょうがないでしょ！？ユトより足が短いんだよ！」

「短足？」

「違うよバカァァ！！」

口では絶対に勝てない夏咲は、それを改めて痛感してとうとう拗ね

てしまった。

さすがにちょっとした罪悪感に駆られるユト。声をかけたいところだが、彼の性格上それは難しい。彼は不器用なのだ。

ユトはゆっくりと、それに加えて気まずそうに俯く夏咲に近寄る。

そして、恐る恐る口を開いた。

「ミ、ミリナ、その…あの…」

「……………」

ユトは、なかなか言葉が出てこない。いざ口に出そうとすると、うまくできないのだ。

が、風の中に漂う沈黙を破ったのは、拗ねているはずの夏咲だった。

「…寂しかっただけなんだよ」

「…………え？」

「だから、寂しかったんだよ！一人放置されて！」

夏咲は少し涙ぐんだ目をした顔を上げた。彼女の年齢は16歳なのだが、まるで中学一年生のような顔つきだ。その表情にユトの心は

さらに締め付けられる。

「ねえ、ユト、これ…」

「ん?…これは…」

そして夏咲は自分のポケットから、あるものを取り出してユトに渡した。

それは、四つ葉のクローバーだった。

「足下にクローバーたくさんあったから、四つ葉のクローバーを見つけてユトにプレゼントしようって思って、それで…」

声をつまらせる夏咲。正直なところ、彼女は『泣き虫』と言われるような性格なのだろう。すぐに涙目になるし、それを頬に伝わせる。

そして、普段は冷静でクールなユトが彼女の涙に弱いというのも事実だ。

「……えと、なんていうか…あ、ありがとな」

「う、うう……」

ユトは不器用なりに、彼女の髪をガシガシと撫でた。

夏咲はどうしていいかわからず、ただうめき声を上げる。

が、気恥ずかしくなったのか、ユトは手を離して話題をそらせた。

いや、そらせたと言うよりは、本題にしたといえる。

「…なあ、今回の『目的地』までどれくらいだ？」

それを聞いた夏咲は、ユトの真剣な眼差しを確認したのち、まだ少し潤んでる目をして言った。

「えっと…目的地はここからあと2キロくらいのところにある『ガリナ』って街だよ」

それを聞いたユトは視線を前に向け、そして歩き始めた。夏咲もトコトコとそれにつづく。

ユトが言った。

「なら、じきに着くな。今回の『仕事』の内容をもう一回教えてくれ」

「ええー…出発のときに言ったの、聞いてなかったのお？」

「……うるさい」

少し申し訳なさそうに顔を背けるユト。

「もう、わかったよ。：今回の『仕事内容』は、『ガリナを襲うクレジアの撃退』だよ。ターゲットの種類は『火炎系の準人型』：まあ、ありきたりだよ。数は3、4体っていう報告だよ」

「そうか：早く片づきそうだな」

「ユトがサボったりしなけりゃ、ね」

うるせ、とユトは小さく呟き、そして手に黒い手袋をはめた。夏咲は前髪を片方によせ、黒と白のひまわりの形をしたピンでとめた。

夏咲が言った『クレジア』とは、数年前に『とある実験』を受けた『ヴィーツァー』が、人の理性、本能に『殺害』を加えられ、そして『新たな力』を植えつけられた生き物。

彼らにはたくさんの種類があり、今回のターゲットは火炎系、すなわち火を主に操る。準人型というのは、『人語を理解し、姿形も人間の過半数をとりとめている』ものをさす。

クレジアの語源は、英単語のクレイジーからきている。

「よし、とりあえず急ぐぞ」

「わかったよ」

二人は目的地に向けて駆け出した。

上には雲一つない快晴の空。

その遙か前方には黒い雲が死臭を漂わせながら上がっていた。

「ちょっとユト！速いって！！」

「お前が遅いんだろうが、短足」

「だから背が小さいだけなの！！」

崖道は最後まで騒がしかった。

ガリアの街

ユトと夏咲はガリアの街の入り口まで来ていた。

ただ、本来なら入り口と思われる門のようなものは破られており、ここが正門かどうかはさだかではない。

門の向こうに見える街の風景はひどいものだった。

大通りはまるで何か巨大なモノが通った後のように荒れており、立ち並ぶ建物は穴がぼこぼこことあいていて原形をとどめていないものさえある。

二人は街の中へと足を踏み入れた。

「こりゃあ…ひでえな…」

ポツリと感想を漏らしたのはユトだった。

夏咲が言う。

「もともと、ガリアは商業が盛んな街なんだよね。だから強いヴィーターがいなかったんじゃないかな？」

「でも今回この街を荒らしたのはレベルの低い『準人型』なんだろう？いくら数が少しいるからって言っても、もう少し抵抗できたんじゃないのか？」

そのユトの言葉を聞いて、夏咲は軽く微笑んで言った。

「ねえユト、準人型のクレジアの特徴は？」

それに対してユトは少し困惑の表情を見せる。

普段、クールな彼にとって、なかなかしない表情だ。

「ええっと、体の過半数が人間の原形をとどめている、だろ？それから……」

「…それから？」

「……ミリナみたいに足が短い」

彼が悩む姿を楽しむかのように見ていた夏咲に腹をたてたのか、ユトは軽くカウンターをしかけた。
当然、怒りをあらわにする夏咲。

「もう！！だから背が低いだけなの！足の長さは普通！！」

「はいはい」

それには冷たく対処するユト。

この扱いに慣れている夏咲は話題をもどした。

「もう…いいーい？準人型のもう一つの特徴は、集団で行動をすることを好まない、ってことよ」

それを聞いたユトは顔をしかめる。

「だったら、何でまだ街に複数のクレジアがいて、こんな依頼が舞い込んだんだ？」

夏咲がいつになく真剣な顔をして答える。

「これはあくまで推測なんだけど、この街のクレジアは誰かの駒に
されている、のかも」

「つまり…『準人型以外に親玉がいる』と?」

「うん、その可能性が十分に高いね」

ユトは少しだけ夏咲に感心した。

彼らのように一般よりも能力値の高いヴィーターは、2，3人でグループを作り行動する。

いや、行動というよりは『仕事』と言ったほうが適切かもしれない。
仕事内容はいたって単純、今回のように誰かに依頼されたことを遂行するだけだ。

夏咲の手元の資料にはきっちりとその依頼書があり、依頼の内容と報酬が書かれている。

彼らはその報酬をもとに生活をしているのだ。

さらに依頼書には特別なインクで施されたサインがしてある。

このサインには『政府公認の依頼』という意味があり、主に依頼を受けるヴィーターたちはそのサインがない限りは受け付けない。

依頼者は各地に配置された『ビルバス』と呼ばれるところに行き、サインをもらって信頼できるヴィーターに依頼する、という流れだ。

夏咲とユトはペアを組んでいる。それほど大きくない建物に住み、昼夜をともにする。

いわば、二人の家のようなものだ。

主に夏咲が依頼を受け付け、それを二人で遂行する。

ユトが基本的にクレジアに攻撃することのほうが多く、夏咲はさっきのように状況を把握したり彼をサポートする側に回ることが多い。

ユトには彼女のような推測はあまりできないため、普段は少しじめたりするものの実戦ではかなり尊敬している部分もあるのだ。

彼の性格上、それを実際に口にだせないのだが。

「そうか。ならさっさと終わらせようぜ。家帰ったら、りんご飴あるから」

「ほんと！？わかった！」

りんご飴、という単語に心を躍らせる夏咲。彼女の好物なのだ。そのはしゃぎように、感心したことに少し後悔するユト。が、そのとき、

「はあ……だからお前はガキだって……！！！」

「だからガキじゃな…い！？」

ユトがいつものように少しからかおうとしたとき、何かの警告を肌で感じたユトは夏咲を抱えて横に飛んだ。

彼が下敷きになるよに着陸したため、羽織っていた布がすこしほつれる。

「ユユ、ユト！？急になんなのさ！」

彼の胸のなかでじたばたする夏咲。

が、対照的に彼の表情は真剣なものだった。

刹那、

「!!」

彼らの頭上をバレーボールサイズの炎の塊が勢いよく駆け抜けた。それは少し後ろとなった門に直撃し、炎上させる。

ユトは夏咲を解放して立ち上がった。

彼女もつられて体を起こす。

すると少し前方に、

「キシシ！なかなかいい目をしてるね兄ちゃん！楽しくなりそうだ」

「……ミリナ、あれが今回の……」

「うん、そう。特別変異部位は左肩のみ、間違いないよ」

今回の標的であるクレジアが立っていた。

その姿は影に写すとするほとんど人のように見える。

が、夏咲が言ったように『左肩のみがひどく盛り上がっている』のだ。

そして体色は赤く、よくよく見ると爪がひどく長い。

何より、言っていることはわかるにしろ、確実に人の声ではないのだ。

クレジアはふいに口を大きく開いた。

とたんに、周りの空気が向こう側に少しだけ傾く。

「くるぞ！ミリナ！！」

「うん！」

二人はそれぞれ対になるように横っ飛びをする。

同時に、二人がいた場所を先ほどの炎の塊が走った。

口から熱気を漏らしながらクレジアが言う。

「おいおいどうしたよ！戦わねえのかヴィーターさんよお！！おじけづいたのか！？」

それを聞いたユトは明らかに苛立った表情をつくる。
そして、

自分の胸の前に拳を置いた。

「おいそこのゴミ野郎。相手してやるから俺の姿見て逃げんなよ？」

次の瞬間、

ド……………クン…………

『彼の鼓動が響いた』

同時に、何もない空間から『大きな剣』が構築された。

グリップとなる部分はまるで包帯が巻かれているようになっており、そして刃となる部分は日本刀とはほど遠い形をしていた。

左右不対象な形をとっており、片側は上の部分だけ曲線を描いており、他方は真っ直ぐ伸びている。

ユトの身長より長く、肩幅ほどの刃の高さをしている鋼色の剣が、

ユトの手に握られていた。

その姿を見たクレジアは少し震えながら言葉を漏らす。

「そ、そのでたらめなブーツ：お前、まさか赤い鼓動の：」

しかし、クレジアが言い切る前にユトの振り下ろした強大な一筋の太刀筋がクレジアの体を斬り潰した。

熱氣をもらしながら、声も出さず倒れるクレジア。

夏咲がため息をついて言う。

「相変わらず、派手なブーツの扱いだね、ユト。いや：『赤い鼓動の剣激士』さん？」

：うるせえ、さっさと行くぞ。

そう呟き、街の大通りへとさらに足を進めた剣激士の後を、夏咲は追った。

ガリアの街（後書き）

とある日の二人の家。

ミ「ねえねえユト！見て見て！」

ユ「なんだよ朝からうつせえ…」

ミ「これ！依頼書なんだけどね？サインがないの！」

ユ「…公認じゃないってか？」

ミ「うん、でも依頼内容も何も書いてないの」

ユ「そんなの、依頼書っていうのかよ」

ミ「まあ、一応ポストに入ってたんだし…でね！ここ見て！」

ユ「…ん？なんだこれ？『赤い鼓動の剣激ム』さんへ？」

ミ「うん！『けんげきむ』だってさ、アハハハ！」

ユ「まあ…いちおうこれで『けんげきし』って読めるには読めるからな」

ミ「えっ？そうなの？」

ユ「多分…ってかこんなの見せるために朝っぱらから俺を起こしたのかい？ミリナ」

ミ「だって、その…」

ユ「…ガキめ」

ミ「もう！うるさいよ！！同い年って言ってるでしょ！？」

ヒラリ…

ユ「ん？なんかおちたぞ？」

ミ「あぁー！！こ、これは…！」

ユ・紙を拾う

ミ「あぁー！！だめ！見ちゃだめ！！」

ユ「はいはい、お子様は身長が足りないから取れないだろう？…って、え？」

ユト・紙を落とす

ミ「もう…だから言ったのに……」

ユ「うう…」

手紙「これからも仲のいい夫婦でいろいろがんばってください」

ミ・ユ「……………」

ミ・ユ「……………」

ユ「こんな……子供が俺の嫁さん？」

ミ「子供言うなあああああ！！！！」

次回に続く

白い銃身

少女、夏咲ミリーナの目の前には、その少し華奢な体格には似つかない大きな剣を左肩に担ぐ少年、ユトがいた。

4匹ほどいるクレジアのうち、一体を斬った彼。

ユトの足元にはすでに息をすることを奪われ、灰のようになったクレジアが無残に転がっていた。

夏咲が言う。

「ユト、じゃあそんな感じで残りのクレジアも片付けちゃって」

それに対してユトは空を呆然と見上げて返事をした。

「今回はたまたま相手が出てきたから見つけられたけど、次からは探さなきゃならないだろ？多分この辺りにいたクレジアはさっきの鼓動を聴いて散らばったと思うぞ？」

とにかく面倒くさそうな彼。

そんなユトに、夏咲が前方に見える十字路を指差して言葉を返した。

「じゃあ、私が東の方角を探索するね。ユトは左に曲がって、西側の探索をお願い。見つけ次第それぞれで攻撃、援護が必要なときはこれを投げること！」

そう言って彼女はユトに30センチほどの高さをした黄色い筒を渡した。

「……なんだこれ？」

「もう！そんなのも知らないの！？『忠告花火』っていう名前で、下の紐を引っ張ると空に黄色い花火を打ち上げるの。普通の使い方は、クレジアに対して言葉通り忠告をするものなんだけど、今はその用法は無視ね」

ユトはいつも通りの素っ気ない返事を返し、それをポケットにしまった。

「じゃあね、ユト。気をつけて」

「お前には心配されたくねえよ」

「もう！なんなのそれ！」

「うっせえよ……怪我すんなよ……」

「え？今なんて…？」

「黙れ！さっさと終わらすぞ！」

そうして二人は対になるように歩き始めた。

夏咲の前には崩れた建物が瓦礫と化した光景が広がっていた。灰色のそれらは道にまで侵食しており、少なからず彼女の足を運びにくくする。

「もう…鬱陶しいなあ…」

そんなことを言いながら頬を膨らませる夏咲。

普段、不平不満を言うユトにお子様あつかいされるため、基本的には口にしないがやはり一人となると無意識に言葉に出てしまう。何も考えずとも口に出てしまうほど道には瓦礫がある、というのが最大の原因なのだろうが。

…と、そのとき

「!？」

その瓦礫がそれほど遠くない距離でひび割れたような音がした。

一瞬、建物が倒壊したのか、と考えた彼女だったが、それほど大きなものが崩れたのであればあんな些細な音ではすまない。

彼女は確信した。

「この先…いるんだね！」

夏咲は靴紐を結びなおすと、捕われる足を跳ねるようにして駆け出した。

少し先にあるトラックのタイヤほどの大きさをした瓦礫を飛び越え、軋む地面も気にせず音のした方角に走る。

そのとき、彼女はまだ崩れていない建物の中からさっきと同じような音が響くのを耳にした。

そして、前歯を見せる。

「隠れてるつもりかな!? ばれちゃだよ！」

そう言って、彼女はその建物の穴の開いているところに飛び込んだ。

周りを見渡すと、暗く、埃っぽい臭いがする印象を受けるような建物。

一般の一階建ての住宅ほどの高さしかないので、暗さに相乗してさらに圧迫感さえ感じる。

光は彼女が飛びだ穴と向かいにもう一箇所あいているところから流れ込んでいる。

そしてその光が目や暗闇に溶け込ませることを妨害し、彼女は少し反応が遅れた。

「…あっ！」

突然、影から飛び出した『ソレ』。

間違いなくクレジアだろう。

下手をすれば、不意を突かれていたかもしれない。

しかし、クレジアは夏咲に何もせず、そのまま外へと飛び出して行った。

「え…？ どうして…？ ？」

と、彼女が呟いた瞬間、ドオン、と音を立てて入り口が塞がった。

瞬時に身構える夏咲。

光を失った今、嫌でも聴覚が尖る。

そんな耳に、いつか聴いたような人ではない声が聞こえた。

「ケケケ！ ヴィーターさんよお！！ まんまと罠にかかってくれたな！！！」

それを聴いた夏咲は自分でも見ることでできないであろう顔をしかめた。

外にいるクレジアが続ける。

「最初からこういう計画だったんだよお！お前の相方に仲間の一人がやられたときからナ！！建物の中に誘いこんで、それを確認してから瓦礫で蓋をする、いくらヴィーターでも、女の子のお前にはどかせられまい！！」

そして、高く笑う。

夏咲は笑い声の多さから、外には少なくとも二人以上のクレジアがいることを推測した。

「さあヴィーターさん、ファイナーレだ！！俺らでその天井崩してお前を生き埋めにして、あとは残りの一人も片付ける！！『ボス』と一緒になあ！！」

『ボス』。

その単語を耳にし、夏咲はにやりと笑った。

「へえ…やっぱり私の読みも捨てたもんじゃないね……はやくユトに報告しなきゃ…」

そして、クレジアたちには聞こえない声で呟いた。

そうとも知らない外の連中が叫ぶ。

「じゃあな！！馬鹿な奴で本当にラッキーだったぜ、ガキンちよヴィーター！！！！」

そしてクレジアたちは口から炎の玉を放った。

宣言したように屋根にぶつかり、亀裂をつける。

そしてそれは広がり、そして

ドン！と轟音を残して崩壊した。

ただし、原形の崩れた屋根は下には落ちない。
変わりに、『空に向かって八方に散っていた』。

「な…！」

声を漏らしたのはクレジアの一匹。

熱気を垂らす口を開いたまま声を出す。

「な、なあ、今、『内側から何か』…」

次の瞬間、壁にけたたましい音を立てて風穴を開け、ゆっくりと出てくる夏咲の姿があった。

その手に、『真っ白い光を放つショットガン』を握りながら。

クレジアはいまだに口を塞げず、声を漏らした。

「お、お前、それは…」

それに対して夏咲はどこか自慢げに言う。

「あ、これ？いいでしょお、私のビートだよ。ユトのビートが剣なのに対して、私のビートは『銃』。ユトはあの剣しか出せないけど、私はいろんな種類の銃を出せるんだ、へへ」

そして、彼女は銃の真ん中にある筒状のものを手をあて、コッキングした。

それを自分たちを狩るためのサインと判断したクレジアたちは、意識とは関係なく数歩さがる。

夏咲が笑いながら言った。

「あれ？どうしたのさっきまでの威勢のよさは…。まあいいよ、三
体だね。早く終わらせてユトのところに行かなきゃ」

次の瞬間、

「ケハッ…！」

夏咲から見て、一番左側に立っていたクレジアが散った。

炸裂したショットガンの弾によってクレジアの体に無数の穴があい
てから、コンマ一秒としない間の出来事だった。

そのクレジアだった物体は後方に赤い光を残しながら吹き飛び、そ
して灰色の塵になった。

そして、もう一度コッキングをする夏咲。

それを見た右側に位置するクレジアが口に炎を溜めた。

「クッソ！なめんじゃねえぞおお！！」

そう言った刹那、それを吹き出す。
が、

「うがっ…」

銃声とともに炎弾は碎け散り、そしてそれを放ったクレジアの体も
同様に吹き飛び、それは地にかえった。

残りの一体が怯えながら声にならない悲鳴を上げる。

それを見た夏咲はショットガンを投げ捨て、そして『鼓動を響かせ

た』。

彼女の手には、リボルバーのような物が握られていた。

そして少しだけ微笑み、思わず尻餅をついたクレジアに言った。

「…いい？覚えておいて。私のことを『バカ』とか『ガキ』とか言
っていじめてもいいのは…ユトだけなんだからね？」

銃声が空を駆けたのは、彼女が言葉を発してから一秒後のことだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5371p/>

赤い鼓動の剣撃ム

2011年10月7日13時29分発行